

ともに生きる ともに創る 共生共創通信

VOL.19

舞台個性とことん
ぞくぞく。ともに生きる ともに創る
共生共創事業

撮影：川島彩水

子どもたちの挑戦を 可能にする場づくり



「えんげきのがっこう」アーティストとの協働プロジェクト

「こんにちは！」ガラスの扉を開けて、続々と子どもたちが入ってきます。ここは横浜市にあるstudio oowa。今日は「えんげきのがっこう」の月に1度の活動日です。「ちんどん屋さん」をテーマに、楽器や衣装を作ります。

友達とじゃれ合っていた子は、長い筒を見つけると、口をつけてブオーッと鳴らして遊び始めました。折り紙やマスキングテープを使って衣装を完成させた子は、今度は旗に絵を描きます。引き出しから慣れた手つきでパラロイドカメラを取り出した子は、みんなの様子を撮影して回ります。向こうでは「おうちをつくりたい！」の声とともに、ダンボールで家づくりが始まりました。

あちこちから「パー！」と呼ばれるのは、スタジオを主宰する写真家の加藤甫さん。「共生共創通信」のカメラマンでもあります。興味を持ちそうなものをそつと手渡したり、自ら箱を叩いて見せたりしながら、子どもたちに寄り添います。

やがて、それぞれが作った楽器や衣装を身につけて、スタジオの斜向かいにある公園へ出かけました。階段の上の広場をステージに見立てると、本物のギターとほうきを用いたエアギター、そしてボールによる即興バンドのできあがり。青空に「oowa」の旗が大きくあがりました。

神奈川県あそび歌プロジェクト『世界のうたとあそぼう!』

このプロジェクトでは、世界の「あそび歌」を通じて多文化の魅力を発信するために、国内外のあそび歌をリサーチし、日本で暮らす子どもたちが誰でも楽しめるように歌詞や振り付けをアレンジしています。



スリランカのあそび歌 「カルンカゲディヤ」であそんでみよう!

スリランカのおじいさんのお話が語り継がれ、現代のあそび歌となった「カルンカゲディヤ」は、スリランカの小学校や幼稚園でさまざまな振り付けがされて、子どもたちが歌ったり踊ったりして遊んでいます。『世界のうたとあそぼう!』でも、日本語の歌詞をつけたり、曲の途中でテンポを変えてみたりと、オリジナルのアレンジをしてみました。身振り手振り一つ一つにスリランカらしい動きが感じられる楽しい遊びです。ぜひみなさんも挑戦してみてください!これまでに作成したあそび歌のレクチャー映像は、神奈川県公式YouTubeチャンネル「かなチャンTV」からご覧ください。



「カルンカゲディヤ」
レクチャー映像
(YouTube)

2024年度神奈川県 共生共創事業 今後のラインアップ

2025年2月22日(土) 演劇
小田原シニア劇団チリアクオールディーズ
『切れ端のパレード』
小田原市生涯学習センターけやき ホール

神奈川県では、年齢や障がいなどにかかわらず、すべての人が
舞台芸術に参加し楽しめる「共生共創事業」を実施しています。

2025年2月22日(土)、23日(日) 演劇
横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」
第9回公演『夏の夜の夢』
ヨコスカ・ベイサイド・ポケット



<https://kyosei-kyoso.jp>

★共生共創フェスティバル★

2025年1月に開館50年を迎え、4月から休館となる神奈川県民ホール。休館前の一か月間となる3月は「ありがとう神奈川県民ホール」と題して、さまざまなイベントを開催します。共生共創事業も公演や展示、ワークショップ等の企画を実施しますので、ぜひお越しください。

★2025年3月5日(水)～9日(日) 音楽
神奈川県あそび歌プロジェクト
『世界のうたとあそぼう!』
展示(全日程)、ワークショップ(8日のみ)
神奈川県民ホール ギャラリー

★2025年3月8日(土) 演劇
横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」
レトロシアター『あおげあおげ』『かさじぞう』
神奈川県民ホール 小ホール

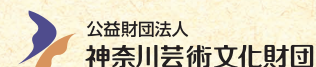
★2025年3月9日(日) 演劇
精神障害を考える演劇
ワークショップ・プロジェクト
『IKIZAMAミュージックばーていー』
神奈川県民ホール 小ホール

★2025年3月15日(土) ダンス
チャレンジ・オブ・ザ・シルバー
『Largo』
神奈川県民ホール 大ホール

お問合せ

公益財団法人神奈川県芸術文化財団 社会連携ポータル課 〒231-0023 横浜市中区山下町3-1 神奈川県民ホール内
電話 045-222-0553 (平日 10:00～18:00) ファックス 045-663-3714 メール kyoso@kanagawa-af.org

主催 神奈川県 企画製作 公益財団法人神奈川県芸術文化財団 発行 2025年2月 編集・ライター 橋本誠、福井尚子 デザイン 水澤充 (MYG round inc.)



チャレンジ・オブ・ザ・シルバー

安藤洋子さんに活動についてうかがいました。



撮影：加藤甫

Q1 チャレンジ・オブ・ザ・シルバーでは、横浜市での継続的なワークショップの他、県内各地でシニアを対象にしたダンスワークショップを展開しています。ダンサーを対象にしたワークショップと異なる点や大切にしていることはありますか。

対象がシニアでもダンサーでもあまり大きな違いはありません。ワークショップを通じて、その人の身体感覚が磨かれて、いろんな「気づき」に繋がったらいいなと思っています。正解を与えるというよりも、きっかけづくりをしているため、もしかしたら遠回りかもしれないけれど、「気づき」を得ることで今まで当たり前だと思っていたことから視野が広がる。それは参加者が誰であろうが変わらないと思います。

Q2 2019年1月のプレワークショップから6年が経ちます。参加しているシニアの皆さんにどのような変化がありましたか。

周りと自分を比べないようになったと思います。ワークショップでも作品創りでも常に探っているのは、身体の不思議。身体づくりがどうか、ダンスの経験がないとかは、何の問題もないということを共有できるようになったので、皆楽（らく）そうですね。それぞれがとても個性的で、でも自然で、自分の心に素直。それは身体と心が一致してきているということ。あとは、皆私に怒られるから（笑）、協働意識で頑張ろうと、励まし合っている感じがあります。皆で一緒にやることに価値や大切さを感じているようです。

Q3 チャレンジ・オブ・ザ・シルバーの取組が評価され、ドイツのケムニッツ市でシニアたちへ指導・振付を行い、2025年1月にダンス作品が

葉山で開催されたワークショップの様子



上演されたと伺いました。どのように作品づくりを進めていきましたか。

日本でのクリエイションを活かしつつ、ヨーロッパの人たちはジェスチャーやポーズが得意なので、あえて形（フォルム）ではないこと、例えばとにかくゆっくり歩くということから始めました。

Q4 作品づくりのプロセスで大切にしていることを教えてください。

正直であることですね。いつもの自分のままで、良いときも悪いときも淡々と平常心でその場にいること。上下関係を作らないで、一人の人間としてちゃんと瞬間的に向き合って、リスペクトするというのが、皆の意識にあるような気がします。また、このプロジェクトで最初に創った作品が映像だったため、生身でぶつからずに、フィルターを通して客観的にお互いを見ている。映像監督の金巻さんがプロジェクトに関わり続けてくれているのも、良いバランスを生み出している一因かなと思います。

Q5 2025年3月の公演は、2024年に上演された『Largo』の第2弾ですが、劇場も、シニアのメンバーも異なります。どのような変化があり、今回はどのような作品を上演しようと取り組んでいますか。

第2弾にあたっての変化としては、皆さん前回の本番で手応えがあったのか、不安がなく、何かを信じている。新しい人たちも「何かありそうだ」と思ってくれている。それぞれが自身の課題を見つけて、ただ変化していきただけじゃなくて、積極的に変化させていくことを楽しむ力がついてきました。ありのままの自分を舞台に置く勇気を皆でもっていこうという感じです。

今回の舞台も、今後のプロジェクトの展開としても、「シニアがそんな表現をするんだ、それも身体表現なんだ」ということを楽しんで打ち出していきたいと思っています。

チャレンジ・オブ・ザ・シルバーとは

安藤洋子さんが、神奈川県でシニアと新たなダンス表現を創り出すプロジェクト。ワークショップを重ねながら、年に1度、ダンス作品を創作・発表しています。2025年3月15日(土)に神奈川県民ホール大ホールにて『Largo』を上演予定。



studio oowaは、横浜市西区にある写真家の加藤甫さんが主宰するスタジオです。ダウン症の子をもつ親の会、ヨガ教室のほか、特別支援学校の先生による「特別支援教材をつくる会」や、造形教室、「えんげきのがっこう」などを企画し、知的障がいのある子どもたちとアーティストとの協働プロジェクトや居場所づくりなどを行っています。

スタジオの名前「oowa」は、加藤さんのダウン症の長男、朔くんが発したオリジナルの言葉が由来。「おーわ、は大きいとかたくさんという意味に変換できる言葉だと思っています。本来は、おーわだと通用しないから、それは大きいだよ、という理由から、この場所を選んだそう。

開催されていた「えんげきのがっこう」は、以前から加藤さんと知り合いだった演出家の萩原雄太さんと協働で行うプロジェクトです。2024年8月から始まり、主にoowaに普段から出入りしている、幼児から小学生の子どもたちが参加しています。



撮影：川島彩水

studio oowa

横浜市西区中央2-46-21 万代ビル1F

https://www.instagram.com/studio_oowa/

助成：横浜市地域文化サポート事業・ヨコハマアートサイト2024

オリジナルの言葉や概念を尊重する



中央が加藤甫さん

共生共創通信 子どもたちの挑戦を可能にする場づくり

教えてあげるかもしれない。でもここでは、違っているでもいい。社会が認識できない言葉や概念を、そのまま尊重したいと思っています」。(加藤さん)

スタジオは公園の目の前で、小学校の隣にあります。特別支援学校に進んだために近所の子どもたちとの接点が減ってしまった朔くんに友だちができたという思いや、公園へすぐに遊びに行けると

起きていました。「活動と子どもたちの相性もあるし、理解するのに時間がかかることもあるから、長い目で見ています。一番大事なのは、子どもたちが萩原さんというアーティストに出会うこと。社会の規範よりも自身の美学や哲学を重んじるアーティストは、様々な『こだわり』を持つ子どもたちのよき理解者になってくれるのではないかと期待しています」。(加藤さん)

また、ワークショップの時間だけではなく、その前後の時間も大切にしています。この日も、プログラムの後に子どもたちが面白い物に行くのを、加藤さんが後ろからそっと見守る姿がありました。「障がいのある子は、放課後待ち合わせで、子ども同士でどこかに